

2025年度（令和7年度）学校評価自己評価表

松永中学校区	校番 33	福山市立柳津小学校
最終更新日		2026年（令和8年）2月18日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 資質・能力	【知識・技能】【思考力・判断力・表現力】【主体的に学ぶ力】【自己形成力】
・評価はすべての学校で「十分満足できる」「おおむね満足できる」と評価された。 ・評価指標は短期では評価しにくい。評価項目の検討が必要。 ・学校情報の外部への発信は実態がよくわからず評価しにくい。	・全国学力調査では、全国平均を下回っており、低学力の子どもが多く、学力定着に課題がある。 ・同調査の「意識調査」ではほとんどの項目で全国平均を上回っている。 ・挨拶ができる子どもが増えてきた。校区で取組んだ成果が見えてきた。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	・確かな学力を身につけ、自ら進路を切り開く子ども ・自己肯定感が高く、社会に貢献できる子ども
		中学校区として統一した取組等	・「主体的な学び」の授業づくりに取組み、学力の向上を図る。 ・「自己表現」「あいさつ」に取組み、自己肯定感の向上を図る。 ・「自分で選び・決める活動」に取組み、自己形成力の向上を図る。

III 自 校

ミッション		育成する力 資質・能力		【知識・技能】【思考力・判断力・表現力】【主体的に学ぶ力】【自己形成力】	
地域や保護者の信頼に応え、地域住民から愛される学校を地域と共に創造する		めざす 子ども像		1 自ら考え学ぶ意欲的な子（確かな学力） 2 主体的に活動し、自ら成長する子（自己肯定感） 3 豊かな心を持ち、地域から応援される子（豊かな心）	
学校教育目標		研究	テーマ	自分の考えを持ち、共に学び合う児童の育成 ～主体的・協働的な学びができる授業づくりの工夫～	
進んで学び 豊かな心でたくましく生きる子どもの育成			主内容等	国語・特別活動	
現 状		めざす授業の姿	【国語】対話をもとにした学び合いのある授業づくり 1 一つ一つの言葉にこだわって理解を深め、語彙力を向上させる。 2 自分なりの読む視点をもって全体と部分を行き来しながら読み、対話を重ねることで、内容を深く理解させ読み取る力を向上させる。 3 相手意識を持ち、条件に合わせて書いたり情報を活用したりして書く力を育てる。 【特別活動】対話をもとにしたよりよい集団づくり 1 学級会を通して多様な考えや価値観を共有し認め合えるようにする。 2 話し合ったことをもとに自治的活動を行う。 3 活動を振り返り、新たな議題の提案や課題解決に向けての取り組みを考え行動できるようにする。		
〈児童生徒〉 ○児童が、自分たちで対話を通してよりよい学級をつくろうとしたり、学校生活をよりよくしようとする意識を持つ児童が増えた。 ●今後は、児童が自らの意思決定をしたり、集団としての合意形成をしたりするなど対話をもとにしたよりよい集団づくりの取組を進める必要がある。 ●家庭学習の習慣が十分に身につけていない。（家庭学習の時間も短い） 〈授業〉 ○実態把握をもとに子どもの躰を予想した教材研究、授業改善を行うことで基礎学力の定着を図った。 ○学びの成果物やふりかえり、相手意識を持った書く活動により、書く力がついてきた。 ○学習端末の ICT 機器の有効活用（調べる・自分の考えをまとめる・発表する・友達と意見交換する）を学年に応じて進めた。 ●基礎学力の定着が十分でない（下学年の学び直しが必要）児童がいる。手厚い個別の支援が必要である。 ●語彙力が十分についておらず、文章を理解できていない児童がいる。					

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	70以上 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	70以上 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
4	主体的な学び の授業づくり を進め、学ぶ 意欲と学力向 上を図る	★	見 直 し	○主体的・協働的 な学びができ る授業づくり 通して学力の 定着を図る。 (単元末テスト 思・判・表の項目 で到達率80% 以上。単元末テスト 思・判・表の項目 で到達率40% 未満の児童を○)	○児童のつまずきの 分析、授業づくり ポートフォリオ の作成を通して 授業改善を図る。 ○帯タイムや放課 後の学力補充、家 庭学習で漢字、計 算の力をつける。	○取り組みの実 践交流を8月 と12月に行 う。 ○帯タイムや放 課後学力補充 の確実実施。家 庭学習の習慣 化。	○学力テストの誤答分析 から児童のつまずきを 明確にし、授業づくりポ ートフォリオを作成・交 流をした。 模擬授業を行うことで 指導者自身の課題を明 らかにし、教材の味方・ 考え方を学んだ。 単元末テストについ て、国語科・算数科共 におおむね指標を達成 できた。(40%未満が 全校で2名) ○2学期から、学力向上 に向けて計算タイムの新 設、読書タイムの実施時 間・ウミベノマナビの取 組み方の変更を行っ た。 月初めのパワーアップ カード(暗唱・音読な ど)で家庭学習の定着 を図った。	4	3	○国語科では、学習のゴ ールを提示し、相手意 識・目的意識を明確に した授業を行う。 算数科では、授業内 で適用題まで必ず行 い、つまずきを見取 る。学びを深めるた めにノート指導を行 う。 ○2学期から変更した 取り組みを確実に実 施する。家庭学習の目 標を、「30分以上上 集中して学習する。」か ら「ノーマディアで、 30分以上集中して学 習する。」に変更し、 漢字・計算以外に読書 や暗唱を充実させた。 より集中して学習で きる児童を増やして いく。	○国語科では、相手・ 目的意識を明確に 単元のゴールを意 識した授業を行う ことで意欲を継続 させながら学習す ることができた。 算数科では、児童 のつまずきを見取 り、授業内で適用 題まで行うように した。(単元末テスト ：国語科到達率 86%・40%未 満0人、算数科到 達率74.2%・4 0%未満6名) ○福山市学力調査 (4・5年生)は、国 語科算数科共に市 平均を上回った。	4	3	3	○児童のつまずきの分 析をもとに、授業計 画を立て、見通しを 持った授業を展開し ていったことで、児 童にとって、分かり やすい授業になり、 学ぶ意欲も高まっ た。数値目標の達成 に向けては、算数科 の知識技能の積み上 げができていないこ とが大きな原因と考 える。計算タイムの 取り組みに加え、そ の学年につけるべき 力をつけて次の学年 に上げられるよう指導 事項を精選し、やり きらせる指導を今後 も継続していく。 ○福山市学力調査にお いて、4・5年生共 に漢字に課題がみら れたため、漢字定着 の強化も図る
4	児童の自己肯定感を 高める。	★	継 続	○他者とかかわ りあいながら、 学校及び学級 をよりよくす る活動を行う。 「学校に行くの は楽しいと思う 児童」90%以上	○異学年の活動(児 童会活動、委員会 活動、クラブ活 動)学級活動など 自治的な集団活 動を設定する。 ○定期的に、児童の 情報共有の場を 設定し、連続欠 席、遅刻の未然防 止、初期対応を組 織的に行う。 ○生活習慣の確立 とスマホ・ゲーム の使用時間を減 らす取り組みを 行う。	①学校や学級の 生活をよりよ くするための 活動を行う。 (児童アンケート 肯定的回答80% 以上) ②校内委員会や 終礼で児童の 情報共有の場 を月に2回以 上設定する。 ③ゲーム(スマ ホ・タブレット を含む)の使用 時間を減らす ことができる。 (児童アンケート 肯定的回答70%)	「学校に行くのは楽しい と思う児童」85.8% ○「学校や学級をよりよ くするための活動を行う」 91.8%。学級活動を軸に 自分の考えを他者に伝 える場を意図的に仕組 むことで、児童が意思決 定することができた。 ○週に1回程度、児童の情報 共有の場を設定し、組 織的に児童や保護者へ の対応を行うことがで きた。 ○全校朝会や家庭学習な どでメディアの使用に 関する指導を行った。ま た、外部講師を招聘し、 ネット・ゲーム依存症に ついての職員研修を行 った。結果、使用時間減	3	3	○児童会行事のキッ スタイムや学級集団、縦 割り班活動など他者 と関わり合う機会を 効果的に設定し、実施 する。 ○引き続き情報共有を 随時行い、報告・連絡・ 相談を確実にし、諸問 題に組織的に即時対 応を行う。また、情報 共有の場を定期的に 設置し、組織的に児童 や保護者への対応を 行う。 ○外部講師による授業 を実施し、ネット・ゲ ームの適切な使用方 法についてテキスト を用いて児童に考え させる。各学期に外部 講師からネット・ゲー	「学校に行くのは楽し いと思う児童」85% ○「学校や学級をよりよ くするための活動を行 う」91%。キッスタ イムなど他者に考え を伝える場を仕組 むだけでなく、考えたこ とを実行することが できた。 ○週に1回、児童の情報 共有の場をもち、組織 的に児童や保護者へ の対応を行うことが できた。 ○外部講師を招聘し、3 年生以上にネット・ゲ ーム依存症について 授業を行った。また、 テキストを用いて、ネ ット・ゲームの適切 な使用方法を学習し、 児童と保護者が使い 方を見直した。また、 職員研修と保護者向け	4	3	3	○児童会行事や異学 年活動など自治的 な集団活動を意図 的に行う。 ○情報共有を随時行 い、報告・連絡・相 談を確実にし、諸問 題に組織的に即時 対応を行う。 ○テキストを用いて ネット・ゲームの適 切な使用方法を考 える機会を継続す る。動機づけ面接な ど、児童へのかかわ り方の職員研修も 行う。

					以上)	少43.5%変化なし43.5%、増加12%だった。			ムの使用方法について指導を受け、教職員、児童、保護者がメディアの適切な使用について見直す場を設定する。	の講演会も行った。結果、使用時間減少54%変化なし32%、増加14%だった。				
4	教職員の資質・能力の向上を図る。	継続	○教職員が元気で児童に向き合える職場環境づくりを行う。 「仕事にやりがいを感じている教職員」100%	○放課後は職員室で事務作業を行い対話することで情報交流と共有化を図る。 ○地域・保護者への積極的な情報発信を行い、地域・保護者とつながる。	○授業づくりなどで失敗を恐れずに挑戦することができている教職員100%。 ○学校だよりを毎月発行し、HPの更新を月に2回以上する。	○失敗を恐れずに挑戦することができている教職員87.5%。全教職員でSWOT分析を行い、本校の強み、弱みを出し合い、2学期からの取組を考えた。 ○毎月の学校だよりをHPだけでなく、学区のまちづくり推進委員会のLINEでも情報発信を始めた。 ○「ようこそ先輩」として児童にかかわった外部の方の名前と写真を掲示し、児童、保護者、地域の方に学校の取組を発信する。	3	3	○第2回目のSWOT分析を、教職員で行い、職種をこえてそれぞれの立場で取組を一緒に考えることで、教職員の今後の目標に向けた取組の共有をはかる。 ○地域とつながり、信頼され開かれた学校をめざし、積極的な情報発信と、地域の人材の活用を行う。	○放課後、職員室で仕事をする教職員が増え、自然に児童の様子についての情報共有をしたり、お互いに仕事を助け合ったりするようになった。 ○毎月の学校だよりをHPだけでなく、学区のまちづくり推進委員会のLINEでも情報発信をした。町内の回覧板にも入れてもらい、全世帯に柳津小の取組を知らせた。 ○「ようこそ先輩」として1年で延べ148名の方を招聘した。児童には多くの人に自分たちが支えられていることを実感させることができた。	4	4	4	○放課後職員室で仕事をすることを継続し、児童の様子や授業について自然に意見を交流し風通しのよい職員室にしていこう。 ○HP、地域のLINE、回覧板を利用した学校通信で、児童の様子を知らせるだけでなく、学校が考えていること、目指していることなどを伝え、支援してもらえよう更に内容を吟味する。 ○今後も地域の人材を発掘し、「ようこそ先輩」として授業の中に取り入れていく

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。